

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2010 年度研究成果報告書

研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程前期課程 2 年	大島 孝子	
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部福祉学科教授	森本 佳樹	
研究課題	日常生活圏における「住民主導による互助ネットワーク」の形成過程について―活動にかかわる住民の意識とその変化に焦点をあてて―	個人・共同の別	個人

研究の概要 (200~300 字で記入)

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入)

[地域コミュニティ活動] [互助ネットワーク] [住民の主体感]

本研究は、日常的な生活圏域とされる小地域での、住民主導による地域コミュニティ活動の互助ネットワーク形成のプロセスについて、活動にかかわる住民の意識変化等に焦点をあてて解明するものである。研究の方法は、先行文献による研究と事例調査を用いた。事例調査は大都市圏から 5 つの先進事例を選定し、互助ネットワークの形成と活動にかかわる住民の意識や主体感に焦点をあてて調査を行った。このうち 2 事例は住民へのインタビュー調査と参与観察等の詳細な調査を行い、3 事例は組織のリーダー的立場にある人へのヒアリング調査を行った。

研究成果の概要

第一に、都市部の 5 事例 (首都圏 2 事例、近畿圏 3 事例) で共通する傾向として、「活動の担い手」になりうる「強い市民」(注) だけでなく、認知症高齢者や精神障がい者、介護家族、ひきこもりがちな若年層など「弱い市民」をも、地域のコミュニティのなかに包摂しようとしていることが認められた。

第二に、「互助ネットワーク形成プロセス」では、「かかわる」ことを経て「気にしあう関係になる」段階があり、それが「つながり」の関係構築にあたる。この「つながり」の関係ができた後、何か困っていることがあれば自然に「個別の支援やお手伝いをする」という気持ちになっていくことが確認された。

第三に、「かかわる」ことを通じて「他者への関心」が湧出し、その後の変化として「潜在する自分の力を発見」し、「役割や存在感を発揮」することで活動にかかわる住民が「達成感」や「楽しさ・喜び」を実感していく。活動にかかわる住民の主体感 (やる気)・参加意欲は、このプロセスを通じて生成されていくと推察された。

第四に、上記の互助ネットワークの形成プロセスと住民の主体感 (やる気)・参加意欲の生成プロセスに影響を与える要素として、①リーダーの力、②場の力、③コミュニティの普遍的な原理・価値を共有する力の 3 つがあることが明らかとなった。

また、新しい地域コミュニティ形成の萌芽として、①<かかわりの豊かさ>による生活創造と、②<活かしあい>による支えあいの関係の循環―という 2 つの現象が見出された。①は、何らかの困難や生きづらさを抱える人の支援を考えるにあたり、地域のなかで「かかわりの豊かさ」を大切にしながらその人らしい生活を創造していくということ。②は、互いの力を<活かしあい>ながら「支え」「支えられる」といった関係が、地域のさまざまな「場」や「活動」を介し、同時期に循環して生起している現象を指す。すなわち、支援される側であっても何らかの役割を担ったり、地域のなかで活躍する場をつくる、といったことが意識的に行われているということである。

(注) 武川正吾、2006『地域福祉の主流化 福祉国家と市民社会Ⅲ』法律文化社 pp. 60-62

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文
 - ・著者名：大島孝子
 - ・標題 (研究ノート)：コミュニティ政策・理論の変遷と地域福祉との関係について
 - ・『コミュニティ福祉学研究科紀要』(立教大学)
 - ・巻号：第 8 号
 - ・発行年：2010 年
 - ・ページ：111~119 ページ
- ② 日本地域福祉学会第 25 回大会 自由研究発表